



民俗芸能研究家
特定非営利活動法人邦楽指導者
ネットワーク21 副代表理事
西角井正大

第十回講習会が7月7日とちょうど七夕でしたので、「七夕と箏」のお話を少しいたしましょう。まず「七夕」と書いて「たなばた」と読むのを不思議に思われませんか。「たはばた」は「棚機」という日本の古俗のことで、海や川の特別な聖なる水辺に床棚を張り出して、神にお着せする布を機織しながら来臨をお待ちするという祭祀様式に起源があります。織手は「棚機津女(たなばたつめ)」と呼ばれて古事記や日本書紀の神話に登場しています。神迎えは季節の行き交う時期で、神が交代するから季節が変わると考えていたようです。そこに古代中国の7月7日の「七夕祭」の知識と儀礼が入ってきて「七夕」の字が当てられるよ。七夕で和漢折衷文化なのです。古代中国の七夕は女性の手芸の上達を祈る「乞巧奠(きこうでん)」と、牽牛と織女の天の川を挟んでの恋物語の「二星」からなっています。恋ゆえに畑仕事と機織を怠ける二星に天帝が年に一度しか合わせないとお仕置きしたのですから、ロマンチック

くだりか悲しいお話です。この乞巧奠と二星の話が奈良時代以降宮中や貴族の間でもはやされ、やがて武家や庶民に浸透して全国、そしてあらゆる階層に広まったのです。歌にしる、書にしる、機織にしる、農業にしる、武芸にしる上達を願わない者はいないですし、恋物語に心ときめかさない者もないわけですから喜んで受け入れられてきているのです。古く雅な貴族社会の「七夕」の風習は、現在藤原定家に祖流の縁ある京都の上冷泉家に遺っていて、二星は旧暦の7月7日に、乞巧奠は歌道の門弟たちが8月下旬から9月上旬に掛け通りのお祭りをしていきますが、乞巧奠では五色の布や糸と梶の木の葉(天の川を舟で渡ること、に擬してか)を飾った棚の前の2つの机の上に向かって左に「琵琶」、右に「箏」を置いています。これは牽牛と織女を表していると思います。昔天皇が参加した宮中コンサート「御遊(ぎょゆう)」に做ったものでしょう。琵琶の役は天皇です。雅楽形式ですから箏演奏も男でしょうが、琵琶や箏はもちろんながら音楽の腕が上がるようにという乞巧を願う飾りです。これからは会員の皆様も七夕飾りと一緒に箏を飾っては如何でしょうか。



西角井正大プロフィール

- 1963 年文部省文化財保護委員会無形文化課文部技官
- 1966 年国立劇場芸能部制作室演出室主査
- 1995 年日本芸術文化振興会国立劇場芸能部長
- 1997 年日本大学芸術学研究科非常勤講師
- 1998 年実践女子大学文学部教授。

東日本大震災の義援金38,724円を(小学生もおこづかいから協力してくれました!)募ることができ、福島県須賀川支部を通して石巻市へお送りしました。

